

「HSK 季刊わたぼうし」 第37号

発行者:わたぼうし連絡会
発行日:1995年(平成7年)3月27日 '95 春号

第37号のテーマ 障害者と阪神大震災

震災の がれきの中に 人間愛

作：比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義・主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

特集・障害者と阪神大震災

兵庫南部地震情報

発信者：全商連北陸ブロック・S.H

この度1995年1月17日に発生した兵庫南部地震は、マスコミ等でご存じの通りです。つきましては、私たち障害者としても現地に人を派遣し、安否の確認や現状把握に努めてまいりました。残念なことに何人かの障害者が亡くなっています。

現在、大阪を中心に災害で困っている障害者やその家族の避難地の確保をしてきています。大阪府下を中心に各作業所などに呼びかけて支援体制を取っています。また、兵庫県から避難地への移動を確保するためにリフト付きバスをいろいろな所から借りて体制を整えています。

こうした取り組みは、主義主張を乗り越えて幾つかの団体と共に進めてきています。私たち地方の者としては、こうした取り組みに側面から支援していきたいと思っています。ここに流す情報は、ネットワークで伝えられています。

皆様方のご支援とご協力をお願いします。

現地情報・コメント

オーイ！被災現場のみなさん！元気出してよ。話をして、顔寄せ合って、心を通わせて、積極的方針をアピールせよ！一人一人の生活を創りだし、そして共に生きる社会(ソフト・ハード・ネットワーク)を築く主人公はあなたたちなのだから。

何度も何度も確認しよう、これは長期戦だから、力をためよう。被災者の自立した取り組みを支えるのは、みんなで応援し注目している力強さが一番だ。

大谷強さんがNHK「明日の福祉」の録音メモを送って来てくれました。課題を整理し、未来を考える材料の一つとして(勝手に)掲載します。

地震での特別報道番組の製作、ご苦労様です。亡くなられた方や被害に遭われた方に心からお見舞い申し上げます。

また、22日のNHKラジオ番組の「ともに生きる」も聞きました。緊急ですが、タイミングはもちろん、内容も良かったと、思います。

障害者関連の情報はご存じのように、兵庫県の大賀さん→中部障害者解放センター・全商連を通してFAXで手に入っています。

(1)発生時の状況

(先日の放送でも語られていたので、簡単に、障害者当事者、視覚障害者に情報が伝わるかどうか。建物の構造なども含めて、今後の教訓にもなるように。)

特に知的障害者や精神障害者の人には、力強い援助が必要なのだが、パニックになってしまいがちで、ひよっとすると殺伐とした雰囲気の中で、思えばゾットする事態が起きない保証はない。

(2)安否確認・救済について

(だれが探してくれたのか、放置されていたか)

これも、仲間がいる障害者は強い(特に解放運動や自立生活をしている仲間、ついで通所施設やグループホームなどのつながりが重要)。日頃の近所付き合いで顔見知りになっていると強い。一人ぼっちの障害者は放置されている。しかし、こうした人にこそ、いざというときの救済が必要。

職員やボランティアが近くにいた人は救済されやすい。

(3)非難のルートや避難場所の困難さ

- ・移動の障壁(障害者が足手まといにされがち、自力でも移動できにくい状況など)。
- ・自分が今どこにいるか、状況を知的障害者のほうから伝えてくれることはほとんど、考えられない。→安否確認にも遅れをとる。
- ・避難先で建物の構造など障害者対応ができていくかどうか。
- ・介護できる人(食事一つ支援が必要)や医療(血友病、人工透析、精神障害、てんかんなど)の分かる人がいるかどうか。
- ・水不足や薬、トイレ、おむつ、福祉用具、介護機器などが後回しにされている。
- ・生活、医療、福祉情報センターの重要性と情報手段の確保。

(4)取りあえずの生活再建にむけて

- ・障害者が緊急に入居できる仮設住宅や公営住宅の確保(健常者の後回し)福祉の町づくりが障害者の今住んでいるところだけでなく、どこでもできれば、こうした点も対応できたはず。
- ・心理的な不安解消へのアドバイス。
- ・落ち着き先への移動手段の確保。
- ・当座の生活資金の貸し付けや給付など。
- ・医療福祉などのサービスはもちろん重要。

通夜の席で聞きかじった話からー

17日、地震。地震そのものは、来た時点では立ち上がれるものではなかった。そのわずか30秒ほどの間に完全に潰れてしまった家屋については逃げ出すことは健常者でも不可能。文化住宅の一階に住んでいて隣の2階が落ちてきてすぐ横で「助けてくれ」の声を聞いて状況がすぐの見込めないまま、家が歪んでドアが開かなくなり壁の崩れた隙間から逃げ出して近所の障害者の家へ走った者。

ベッドが動いてしまって暗い中をパニックになりながらも電動車いすが動いてホットして何とか抜け出したところへ、近所に住んでいる仲間が飛んできてくれて助かったなど。とりあえず逃げ出した者がそれぞれ近所の障害者の家に走り近くの避難所まで連れていっては、また次ぎに走り、動ける者が連絡を取り合って走り回り、最終的にAさんの行方だけがつかめなかった。

一方、Bさんも介護のない状態でひとりで寝ていたが、何とか家屋が倒れなかった

ので熱帯魚の水槽が割れて水をかぶった程度で、車いすもベッドの脇にあり何とか乗り移って「助けてくれ！」と叫んでいたが、20分位し¥¥て介護者が駆けつけて脱出。警察に押しかけて夜が明けるまで居座る。(情報が集中するところだから)夜が明けて合流。Aさんの行方を探し回る。使える電話、食べ物(例のうどん屋さん)、Aさんの捜索などの条件を考えた上で、拠点にする避難所を決定。

18日、Aさん捜索。倒壊した家屋の下に埋まっている可能性が強い。救助隊も何もない会も行方不明の情報を受けた全障連の依頼で現地入りし、協力。午後11時頃ふとんがでてきた。とりあえず自力で掘り始める。掘るがAさんはいない。

19日、午後4時頃、高知**(FAX判読不明)の支援で遺体発掘。

仲間としての思いと、今後の救助活動に関して考えたこと。

障害者解放運動をしている障害者、組織は強い。それはなぜか。一つはネットワークを持っていること。もう一つは自力で何とかしようと、自ら考え行動すること(ただひたすら救援を待つ前に、とにかくできることはやってみようとパワーがある)。

Aさんのことはともかく、出会えたみんなが、それなりに元気でしたたかであることに、とりあえずホットした。

西宮を歩いていて、私たちの運動とはつながりのない障害者も、それぞれ作業所やサークルを持っている障害者については同じように連絡を取り合い固まって行動していると思われるが、外からの救援を一番必要としているのは、むしろこうした組織を持たない一人一人の在宅障害者なのかもしれない。

外からは連絡が取れず、情報のないところから何ができるのかを考え、とりあえず大阪では受け入れ体制を作ること。資金を集めることくらいしか考えられなかった。それはそれで必要なことだが、もう少し連絡が取れるようになり、情報がお互いに交換できれば、現地へ入り込む支援が必要であると思う。

被災地の障害者が何を求めているのか、それに対応した支援体制を作るには、協力を申し出て下さったボランティア、受け入れ先、物資の整理などの集約と適切な処理が必要になってくる。支援したい思いだけが先行するとかえって混乱を引き起こす。その辺のところはキーポイントだと思う。

とにかくこれは、長期戦だ！じっくりと要求を見定め、必要なところに可能な限り迅速に答えられる支援体制を全国ネットで一から作って行くしかないのだから。

新聞の切り抜きから

重度障害者を5日間放置・神戸市の障害者対策に不満

阪神大震災で自宅に閉じこめられた重度身体障害者が、電話で神戸市に助けを求めたものの相手にされず、5日間ほとんど飲まず食わずに放置されていたことが30日分かった。この障害者はたまたま様子を見にきた福祉施設職員に助け出されたが「一時は死を覚悟した」という。

神戸市には、災害時に障害者や寝たきり老人を救出・誘導するマニュアルがなかったのが原因で、同市は「このような事態は全く想定していなかった。誠に申し訳ない」と話している。

神戸市東灘区の市営住宅の十階で母親と二人暮らしの山本健隆さん(46)は手足が不自由。車いすで生活していたが、地震でエレベーターが止まり逃げ出せなくなった。年老いた母親は余震におびえ、外に助けを求められなかったという。自宅に残っていたパンなどは二日で食べ尽くした。

三日目に市災害対策本部に電話で助けを求めたところ「そう言われても困る、110番にかけてくれ」と断られた。警察と消防には電話が通じず、山本さんはこの時点で命はないものとあきらめたという。

5日目、近所の福祉施設職員が二人をようやく助け出した。山本さんは「弱者はいつも後回し、行政は障害者の命をなんだと思っているのか」と怒る。

自力避難が難しい山本さんのようなケースについて、東京都や静岡県は防災対策を盛り込んでいる。特に東京都は「災害弱者のための防災マニュアル」を策定。

「目の不自由な人」「精神障害者」など障害の種類、程度に応じて、緊急時に手助けする人を決め、連絡方法を確認する安全確保策を決めている。

これに対し神戸市は「どんな障害者がどこに住んでいるかさえ共通の情報として把握していなかった」と態勢の不備を認めている。（「日刊スポーツ」より）

オズの箱

「姫路・オズの箱」というなぞめいた人物が発信する阪神大震災情報が、コピーされ、読めないほど何度もファックスで転送され、各地で広がっている。

障害のある身で震災にあった人々の消息と支援情報にしぼって書いてあるのが特徴で、半月間で21回発信された。

地震発生1月17日の午後に出された第1信。

「みんなどうしているんだ。無事か？だじょうぶか？この通信が届いてくれることを願っている。どんな応援態勢が必要なのか連絡してほしい。連絡がとれないのだ。交通手段がないのだ。生きていてほしい。生き抜いてほしい。」

OZの頭文字を持つ発信人、大賀重太郎さん、月刊『ビギン』と季刊『ジョイフル・ビギン』を発行する障害者総合情報ネットワークの事務局長。『ビギン』は日本で初めての障害者自身が発信する情報誌だ。

震災に巻き込まれた障害者にも一刻も早く情報を、と大賀さんはあせった。だが、姫路の自宅からは現地に近づけない。

窮余の一策が、震災情報だった。B4判数枚にまとめ、郵便とファックスとパソコン通信である。

反響は思いがけないほどだった。たとえば、第一信の呼びかけにこたえて、東京からオートバイに乗った青年たち10人が現地に乗り込んだ。物資を運びながら、行方不明の障害者を訪ねて回る。探し当てた障害者の消息を載せ、介助者や家を探す情報基地にもなった。

2月に入り、発信人は大賀さんから障害者総合情報ネットワーク(〒162東京都新宿区山

吹町354-101)など数団体に引き継がれ、5日午後には、東京の銀座4丁目で、震災障害者のために義援金をつのる。情報で縁を結んだ人々は、12日、神戸YMCAホテルで、「復活を目指す対策会議」を開き、顔をあわせる。 「朝日新聞」より

「阪神大震災」について思うこと 地域住民・肢体障害

先日の阪神大震災は日本の歴史に残る大震災となり、日本中が大騒ぎになっていますが、私なりにこの大災害について思ったことを簡単に書いてみました。

天災は忘れた頃にやってくる、とよく言ったものだ。まさかまさかの大地震が起きた。それも大都会である。大都会で起きたこともあったかも知れない。連日、テレビやラジオそれに新聞など各報道機関が競って災害の様子を伝えていますが、各地方で、毎年どこかで災害が起きています。これだけの報道はしないような気がします。それだけ今回の大都会での災害が大きいということでしょうか。

災害に遭われた中には老人やそれに子供、それに障害者(世間でいう弱者)が多数いると思いますが、公共機関はどれだけのことをやってくれているのか、いつも帳面上で処理している公務員たち。一応私たち国民は、何らかの税金を納めていますので、納めている以上は国民を守る義務があると思います。

今回は特に国の対応がよくないと思う。仮にも一国の主である首相がテレビで災害を知るとはあまりにも情けない限りである。これが世界に誇る経済大国、日本の姿なのかと思うと涙も出ない。

各報道機関の方が早いなんて、どう考えてもおかしい限りである。それにテレビで各大臣が記者会見するとき書いた紙を読んでいるが、あまり良いものではない。本当に災害にあった人のことを思っているのかと、思うと頭を傾げる限りである。そんな日本は大国ではない。大国は大国でもバブル大国ではないのか。バブル大国日本の姿(奢り(オガリ))がまざまざと露出した今回の大災害であるような気が私には見える。

真の大国とは、文明の力を借りて如何なる時も、その国に住む人々をできる限り幸福(文化・教育・福祉)にするのが真の意味での大国ではないでしょうか。馬鹿な親(国家の中で奢っている奴ら)にして、努力する子供たち(国民)といった感じだ。

それに比べて国民の力はすごい。すごいというより「生きる力」といった方が適切なのかも知れない。障害を持った私でも何かできるのではないか。日常私たちは、周りの人々に助けられて生きている。助けてやることも大切なことではないでしょうか。助けられたり、助けたり、それが人であり、人間というものではないでしょうか。それがやがて平等につながると思いたいものです。

また、今回の災害で注目を浴びているのが、民間のボランティアの活躍ではないでしょうか。日本は今までボランティアの重大性が無視されてきたような気がします。人間本来の助け合いの精神や心の豊かさが、この災害で変わって行けば日本の将来も変わっていくと思います。

障害者も健常者も共に助けたり、助けられたりして行けば障害者に対する考えも少はず

つ、まるで北陸の雪のように解けて春になるように変わって行くと思いたいものですね。

物質的には恵まれすぎの日本国、勉強勉強と学問重視の日本国、「この世の中すべてが金や」という人がいますが、確かに人間社会で生活する以上、そうかも知れません。多分そうでしょうね。でも何か悲しいね、寂しいねと私は思います。

今回の大災害は大自然が日本国や日本人の奢りに対して「日本国よ、もっと将来について教えろ」の警告かも知れませんね。

最後に今回の災害でなくなった方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

あなた、知っている？福祉用語

医療ソーシャルワーカー(MSW) (MEDICAL SOCIAL WORKER)

医療、保険機関などにおいて、病人の生活上の諸問題を援助するワーカー。現在は、社会福祉法人立の病院、一部の国公立病院等に配置されており、患者の福祉的側面からの援助を行っている。その法的資格制度の確立に向け、MSWの活動の重要性から業務指針を明確にするため、厚生省に対し専門家による報告書が、1989(平成元年)年3月に提出された。それによると病院などの管理者の監督の下で、(1)経済的問題の解決、調整援助、(2)療養中の心理的、社会的問題の解決、調整援助、(3)受診、受療援助、(4)退院(社会復帰)援助、(5)地域活動の五点を、業務の範囲としている。医療と福祉の連携を図るものとして、期待されている。

障害者のための110番

各種電話相談を行ってきたダイヤル・サービス社(東京都渋谷区)では、1987(昭和62)年6月1日から、障害者のための“110番”を開設した。情報が不足がちな在宅障害者に、どこの役所には手話通訳者がいるか、盲導犬と泊まれるホテルはどこか、車いすでいける映画館など、問い合わせに応じて種々の生活情報を提供する。土・日・祝日を除く午前10時から午後4時まで。電話は03-423-2123。

手話通訳士

聴覚障害者の社会進出に伴い、国による「手話通訳士認定制度」がかねてより検討されていた。1989(平成元年)年11月に第一回試験が行われた。手話の統一的レベルをはかり、一定の技術、知識の向上をはかるものであり、国家資格ではない。聴覚障害者とのコミュニケーションの確立をはかり、依頼者との社会的信頼を願って行われるものである。認定試験は、国または国の指定する公益法人が行い、青森、東京、大阪、熊本の各地で受けられる。全日本聾唖連盟によると、今まで手話通訳士として登録されている人は2,000人を超えるが、登録をせずボランティアとして実際に活動している人が多勢で、その実数は明確ではない。(以上は自由国民社「現代用語の基礎知識93」より転載)

みんなの広場

「ほほえみのつばさ」シンガポール海外旅行に参加して

地域住民・会社員

10月30日から11月3日の4泊5日で石川県身体障害者団体連合会主催のシンガポール研修旅行にろうあ青年3名の手話通訳として参加しました。参加者は総勢で22名、聴覚、視覚、車いす、身体障害者、知的障害者の方と介護者の参加でした。

この「ほほえみのつばさ」は本年(平成6年)から心身障害者の海外研修として始められました。つまり今回が第一回目ということです。若い(参加の条件は40歳以下)心身障害者が各地域で活躍し、今後もリーダーとして活躍をしていく人たちを対象に企画されました。

さて、シンガポールといっても、私の乏しい知識では美しい町並みがあって、赤道近くだから熱く、煙草の投げ捨ては厳しく罰金が取られるぐらいのものでした。確かに、緑が多い中を近代的な建築物が建ち並び、美しく、一年中30度前後で、煙草の投げ捨てや唾を吐いたら7万円の罰金でした。今回の旅行で心に残った素晴らしい経験といえば、観光ができたことではなく、二つの施設で交流ができたことです。重度の知的障害者のアンモンキョ・ディケア・センターと身体障害者作業所ビズリングセンターで見学、意見交換を実施しました。アンモンキョ・ディケア・センターは日本でいえば4階建ての公営住宅の1階がセンターとなり、2階からは普通のアパートでした。大変狭い敷地でしたが、地域社会にとけ込み、交流することを考えたらこういった施設の立地もいいなあと思いました。(もちろん、シンガポールは国土が淡路島ぐらいで狭く、独立した施設はできにくい面はあると思うのですが)運営は寄付で賄っていて、日本のように障害年金制度はなく、非常に厳しいようで、こういった施設も全国で数カ所だけと聞き驚きました。このセンターでの昼食が美味しかったのとお土産にストローとトイレトペーパーの芯で作った鉛筆立てをもらえたのが最高でした。

次に身体障害者作業所ビズリングセンターでは初めて聴覚障害者の若い女性と会うことができ、私たち4人は夢中で手話でコミュニケーションを図りましたが、その女性はASL(アメリカン・サイン・ランゲージ)でほとんど理解できずにまいました。片言の英語での筆談でした。日本から来て、3人が聴覚障害者で1人は手話通訳者であることはどうにか通じたようでした。(ちなみにシンガポールは国語がマレー語で公用語はマレー語・中国語・タミール語・英語で行政用語は英語と言語は多岐にわたってる国です。)現在、此の国はGNP(国民総生産)は世界一であり、労働力が不足していることもあり、ビズリングセンターにも多くの仕事が来ていました。このセンターでは見学になってしまって意見交換ができなかったのが残念でした。夜にはセンターとの懇親会もありましたが現地の通訳者もいましたが、言葉の壁が厚く、コミュニケーションが大変でした。

最後に、この旅行で正直に言って一つ辛いことがありました。それは煙草です。愛煙家の私としては食後に一服の楽しみを奪われたのは苦しかった。レストランはもとより町の屋台にも灰皿はなく、喫煙できるのはホテルの部屋ぐらいでした。これは徹底して自販機ももちろんなく、売っている売店もほとんどないのが現状でこれにはまいました。また、手話通訳としての参加でしたが、この期間を一人で全部通訳するのはやはり無理が

あるようです。来年度からは複数体制を考えていく必要があります。

もし、来年もこの海外研修があるなら多くの障害者が参加できたら素晴らしいと思います。実際に経験することで得ることは多くあります。積極的に参加してください。

私のティータイム

私の好きな時間って、意外や意外人のお話を聞いている時なんです。

聞こえないくせに人のお話を聞くのが好きだなんて、と言われそうなんだけれど「どうして、こんなに好きなんだろう」って自分でもよくわからない。

好きな話題については特にはない。とにかく何でもいいからしゃべって欲しい。"いろいろな話をふんだんに聞きたい。そんな気持ちが私にあるみたい。だからかも知れないし、だからこそ、耳が不自由なことが全然気にならない。

だってだって、気にしていたら聞くこともできないし、お話ししてくれる方もうんざりすると思うんだ。違う？

本当に人のお話を聞くのは大好き。もっともっと聞かせて下さい。

でも、一番いいのは聞こえることだって、私でもわかっています。今は聞こえない私だけれども、いつの日かきっと聞こえるようになるって信じています。

希望を捨てるべきではない。そう思いませんか。

ポエム 心の雨

匿名

貴方が思うより私の体の辛さが……

でも貴女は理解しようとしてくれない

そんな貴女とずっと付き合うのは嫌なんだ

切ない心の傷みを覚えてつかの間に

心の雨が降ってしまう

振り向いて 優しい心で 人の体の辛さを

病で苦しんでいるのに

残される傷みが 解るでしょうか

ただ私は貴女にいじけて

甘えているのではない

言いたくっても貴女の視線が 気になるのです

素直になれない私は貴女が憎らしくって

時には貴方の事を嫌って 心は雨に濡れてしまう

心離れたたくなくって

貴女を困らせてしまうけど

空しい心の傷を覚えてつかの間に

心が雨に打たれてしまう 振り向いて
愛ある心で 独りぼっちの傷みを
病で苦しんでいるのに
外される傷みを 解るでしょう
ただ私は甘えとしていじけているのではない
言いたくっても 貴女の言葉が気がかりなのです
介助が必要なときに限って貴女は冷たい
そんな貴女に私の心を痛めて
雨に濡れてしまう
貴女もこの身になって
人に頼る事があるでしょう
空しい心を冷たい人と向き合うと
心が雨に濡れるでしょう
きっと貴女も 温もりのある心で
助けを求める
それは人間誰しも
愛や温もりを求めて生きる
だから貴女にも優しく人と向き合ってほしい

これからの原稿募集テーマについて

- ・ 家族（父の思い出、母の思い出）
- ・ 私の介護体験（家族、施設での介護、行事、イベント等での介護体験を募集します。）

連載企画募集中

あなたも「HSK季刊わたぼうし」にユニークな連載企画をしてみませんか。趣味、講座、エッセイ等。年4回の担当をお願いします。

編集後記

1月に兵庫で地震がありました。今度はサリン事件で日本中を賑わしています。今年は年明けから信じられないことが多く起こっています。

桜の季節となりました。季節の移り変わりが早く感じられます。「HSK季刊わたぼうし」も発刊して早10年です。今後ともご支援をお願いします。（H.A）

今回は冬号の発行が遅れたので、早期の発送を目指して編集したぞ・・・これで、定期発行が間に合った。ああ、疲れた。（Z.O）

NO.38のテーマは家族